

「まっすぐ歩む」

松川 紗雪

登場人物

松山みゆき (28) 会社員
松山景子 (58) みゆきの母
杉本清太郎 (89) みゆきの祖父 (景子の父)
杉本シン (故) みゆきの曾祖母 (清太郎の母)
山口 (61) みゆきの会社の上司

○会社の一室

松山みゆき（28）が上司の山口（62）

と言い合いになっている。

近くのデスクの同僚たちも、手を止めそのやり取りを見ている。

山口「女のくせに、生意気な口叩くな！」

みゆき「女も男と同じ人間です。ちゃんと意見があります。女性を平等に扱って下さい」

山口「お前のその分かったような発言がいちいち癪に障るって言ったんだよ。誰に向かって言ってるんだ。いかげんにしろ！」

「いいか、みんなお前のこと噂してんだよ。女性らしさの欠片もない、気の強いだけの女だってな。勘違いするなよ、誰もお前のことなんて、評価してないからな」

シーンと静まり返る社内。まわりを見渡すみゆき。覚悟を決め、

みゆき「・・・こんな所での評価なんていら
ないです。されなくていいです。どう
も、お世話になりました」

○みゆきの部屋（朝）

ベッドの上、アラームで目が覚めるみ
ゆき。目覚めは悪い。昨日の山口の発
言が、頭をよぎる。

× × ×

山口「みんなお前のこと噂してんだよ。気の
強いだけの女だってな。誰もお前のこ
となんて、評価してないからな」

× × ×

ベッドから起き上がるみゆき。壁のカ
レンダーの前に向かう。カレンダーに
はバツ印と今日の日付の所に丸がして
ある。その下に“28歳誕生日”の文字。
カレンダーに目をやり、小さくため息
をつくみゆき。

冷蔵庫から飲み物を取り出し、一口飲んだ後、再びベッドに戻り横になる。しばらくすると、また眠りにつくみゆき。

○みゆきの夢の中

深い森の中。少し開けた場所に裸足で立っているみゆき。目の前には、みゆきの祖父・杉本清太郎（88）が背中を向け、同じように裸足で立っている。雨が強く降っているようだが、二人は全く濡れていない。

みゆき「ああ、おじいちゃん」

振り向き、少し微笑む清太郎。

みゆき「おじいちゃん、どうしたの？こんな所で。風邪ひいちゃうよ」

清太郎「大雨でな。家がみんな流されちまつたんだ」

遠くを指さす清太郎。その先に、川が
氾濫し、家々が流され、家財道具など
も流されている光景が見える。

そこには、幼い清太郎をおぶり、他の
子供たちを必死に丘へ上げようとする
曾祖母の杉本シンの姿がある。川の水
は、シンの腰まで来ている。今にも流
されそうなシンの横を、ぷかぷかと浮
いた臼が流れてくる。必死に手を伸ば
し、ようやくの思いで手に掴むと、絶
対に離すまいと力いっぱい引き上げ
るシン。

臼とともに、ようやく避難できた様子
のシンたち。

清太郎 「他は全部流れちゃった。食料も、大
事な着物も、ばあさんの嫁入り道具も。
ただあの臼だけが残った」

シンの姿を見た後、清太郎を見つめる
みゆき。

○みゆきの部屋

携帯の着信で目を覚ますみゆき。携帯を手に取る。画面に“お母さん”の文字。電話に出るみゆき。

松山景子「ああ、みゆき？あのね、おじいちゃんかねー」

○新幹線・車内

黒っぽい服装で、大きな荷物カバンを置き、窓の外を眺めるみゆき。

○杉本家・玄関

玄関の引き戸を開け、荷物を持ちながら中に入るみゆき。玄関からの音を聞き、景子が奥の部屋から顔を出す。

景子「ああ、早かったわね。バス、丁度いいのあったんだ？」

みゆき「うん、駅降りたらちようど来てた」

○杉本家・中

葬式の準備をするみゆきと、杉本家の人たち。景子がみゆきに声をかける。

景子「みゆき、蔵からもの出すのちよつと手
伝って」

みゆき「うん」

○杉本家の蔵

蔵の中で葬式飾りを探している景子と
みゆき。

ふと、蔵の奥の方に置かれた古びた臼
がみゆきの目に留まる。

みゆき「あれ、これって・・・」

景子「ん？ああ、シンおばあちゃんの大事な
大事な臼ね。川に流されたのを必死で掴
んで引き上げたんだって。そうだ、それ
も表に出しといて」

みゆき「え、なんで？」

景子「お葬式の時、空の臼を杵で三回搗くの。
そうやって、亡くなった人を送り出すの
よ」

みゆき「そうなんだ……。あのさ、ひいお

ばあちゃんってどんな人だったの？」

景子「え？ そうねえ、明るくて、優しくて、

気風が良くてね。いつも笑顔のイメージ
だなあ……。でも昔は相当に苦労したみ
たいけど、そんな姿全然感じさせない
ようなおばあちゃんだった」

「おばあちゃんはね、いつも言ってたの。

“形として残るのは、自分がいつも手を
伸ばして掴んだものだけ。どんな逆境で
も、全部、自分の手で掴んでいくんだ。

だから覚悟を決めて、自信持って前に進
んで。大事だと思うものは、絶対に離し
ちゃいけないよ。”って」

みゆき「……。いい言葉だね」

微笑む景子。

景子「シンおばあちゃんのお葬式の時ね、

私が杵をついたの。だから今回はみゆき、
頼むね」

葬式飾りを持って蔵をあとにする景子。

杵を手渡され、臼を見つめるみゆき。

○杉本家・中（日替わり）

清太郎の葬式が執り行われている。読経の中、参列する人々。景子の隣にみゆきが座っている。涙は流していない。ただ一点を見つめている。

○杉本家・外

棺を霊柩車に乗せる親族たち。みゆきは後ろの方で杵を持ち立っている。ふと家の中の方に目を向け、清太郎の遺影を見つめる。すると、かすかに清太郎の声が聞こえてくる。

清太郎の声「みゆき、強く生きるんだぞ。みゆきなら絶対に、自分が掴んだもので、まっすぐ歩んでいけるよ」

清太郎を乗せた車が走っていく中、みゆきが涙を流しながら、力いっぱい臼を三度鳴らした。